大廓式土器の足跡
－もう一つの東海系－

高　梨　俊　夫

1．はじめに

木更津市の椿古墳群が調査されてから早５年が過ぎようとしている。椿古墳群中には、古墳時代前期の方墳である３号墳が含まれていたが、その概要については先に報告したところである(註１)。その後、木更津市高部古墳群の調査や袖ヶ浦市滝ノ口向台遺跡の報告書の刊行等、上総地域西部の古墳時代の出現期から前期にかけての資料が徐々に充実してきており、椿３号墳についても改めて検討すべき点がいろいろ出てきているように思われる。そこで、今回は出土した土器について注目し、検討を加えてみることにする。

出土した土器は、出土状況から主体部土坑内の副葬品である１点を除いてすべて墳頂部に置かれた供献品であると思われる。供献土器の器種は壺と器台であった。この壺の中に大形で口唇部内面に凸帯が巡る東海地方東部に起源をもついわゆる大廓式土器が含まれており、この大廓式土器について、その後の資料収集で明らかになった県内での出土例や県外資料との比較検討をすることにしたい。

通常、東海系土器というと伊勢湾沿岸地域、とりわけ濃尾平野を中心とした地域の土器をさすのであるが、今回は、駿河湾沿岸地域の土器を「もう一つの東海系」として大廓式土器の足跡を辿ってみることにする。

2．大廓式土器とは

大廓式土器は、静岡県沼津市柳沢に所在する大廓遺跡出土の古式土師器を標識として呼ばれるようになった土器群であり、静岡県東部地区における古墳時代初頭の基準資料となっている（註２)。大廓式土器は、大型の壺形土器の口縁装飾帯の幅が７cm以上のものもあり、口縁端が１cm以上の平坦面をなし、内側に折り返したような手法のみられることを特徴とする。これはかつて東遠江の白鬚式、駿河湾西部の曲金式と呼ばれたものに共通した現象である（註３)。

現在、東駿河の編年において、弥生時代後期後半を飯田期(飯田様式)、古墳時代前期を大廓期(大廓様式）と便宜的に呼称されているが、各型式の組列についてはほとんど信憑性のない名称であるとのことである(註４)。しかし、大形の壺型土器については、「大廓式土器」の名称が定着しており、ここでは、大廓Ⅰ－１・２、Ⅱ－１・２、Ⅲという段階が設定され、東海西部との併行関係は、大廓Ⅰが廻間Ⅱ－１～３、大廓Ⅱ－１が廻間Ⅱ－４～Ⅲ－１、大廓Ⅱ－２が廻間Ⅲ－２～４と考えられている。

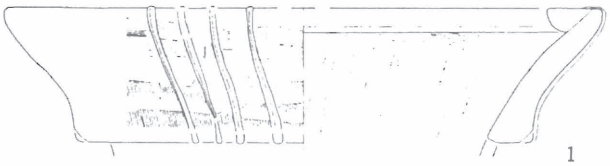
形態は、口縁部の立ち上がりが直立から外傾へ、口縁部外面の棒状浮文が沈線へ、さらに無文へと変化する。また、口唇部内面の凸帯は、断面三角形が徐々に発達し、厚みを増し、下位に厚みを持つ四角形に変化する。註４では、大廓Ⅰ段階からⅡ段階への変化は、凸帯の断面が三角形から四角形へと明瞭であるが、細分については、わからない部分が多い。また、大廓Ⅲ段階は、屈折脚の高坏の出現をもって設定されているが、内容はわかっていないようである。

概ね大廓式は、濃尾平野の廻間Ⅱ式～Ⅲ式に併行すると考えられ、実年代では、３世紀中葉～４世紀前半代の年代観が与えられており(註５)、関東の五領式にほぼ併行するものである。

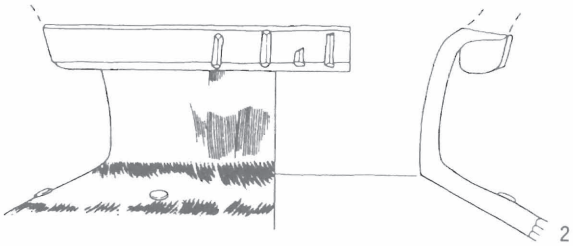
3．県内出土例と共伴土器

(1)　市原市雲ノ境遺跡（註６）

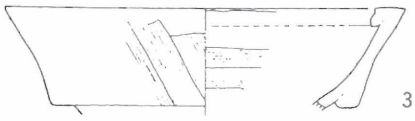
径18.2mの円墳である15号遺構からの出土であるが、重複する竪穴住居18号遺構に帰属する可能性が高いとされる。しかし、18号竪穴住居跡覆土からは歴史時代の須恵器が出土していることから遺物の帰属の判断に関してはやや疑問を感じる。口径23.6cm、黄橙色で



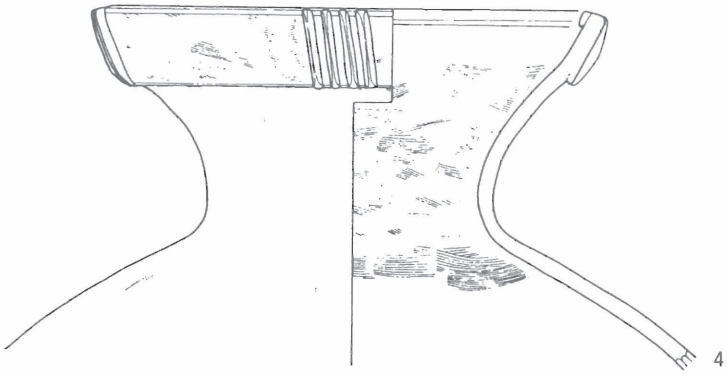
市原市雲ノ境遺跡
15号遺構（円墳）出土
（註６より転載）



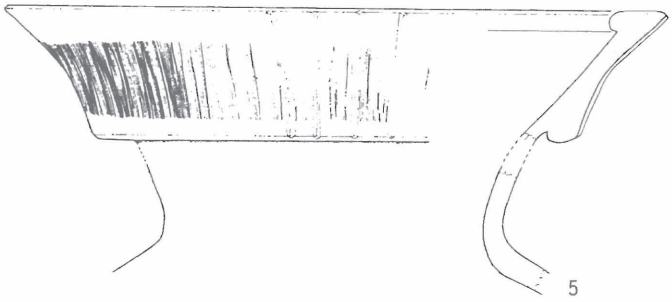
茂原市国府関遺跡
自然流路出土
（註７より転載）



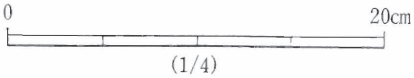
木更津市マミヤク遺跡
309号住居跡出土
（註８より転載）



八千代市ヲサル山遺跡
住居跡Ｄ026号遺構出土
（註９より転載）



木更津市椿古墳群
３号墳（方墳）出土
（註１より転載）



(1/4)

房総半島出土の大廓式土器

胎土は径1㎜以上の白色半透明粒子・白色粒子・赤色粒子と黒色粒子・黒色半透明粒子を含む。外面はハケ（12／1㎝）（左右、上下）ののち一部にヘラナデを加える。4本1単位の断面三角形の棒状浮文。内面はハケののちにミガキ状のナデ。共伴土器には、複合口縁壺、炉器台、網目状撚糸文壺などがある。大廓Ⅰ－2段階のものと思われる。

(2) 茂原市国府関遺跡（註7）

自然流路からの出土で、口縁部上半を欠損しているが、口縁部の4本1組の棒状浮文、肩部の羽状縄文・円形浮文から大廓式の壺と見て間違いないと思われる。この遺構からは533点の土器が報告書に図示されているが、遺構の性格上、編年的な検討を加えるに当たっては詳細な分類が必要ということである。共伴土器は、東海系の廻間Ⅱ式、北陸系の月影Ⅱ～古府クルビ式段階のものである。口縁部上半が欠損しているため、段階比定は取り合えず避けておく。

(3) 木更津市マミヤク遺跡（註8）

309号住居址出土、口径21.2㎝、淡褐色で白っぽく胎土には石英等の大粒礫粒・軽石粒を多量に含む。口縁部外面には斜位のハケメのみで棒状浮文や沈線はない。住居跡からの一括遺物の内の1点であり、他の土器は五領式併行期のものと思われる。大廓Ⅱ段階のものと思われる。

(4) 八千代市ヲサル山遺跡（註9）

竪穴住居跡D026号遺構からの出土、口径26.8㎝、口縁部に4本1組の棒状浮文が4単位ある。形態的な印象では、口縁部が短く口唇部内面の凸帯も形骸化しており、大廓式の影響の下に在地で製作されたものと思われる。共伴土器は、台付甕・壺がある。

(5) 木更津市椿3号墳（註1）

古墳の墳丘裾部からの出土、口径35.2㎝、複合口縁の外面はやや外反して立ち上がり、縦方向の刷毛目調整の後、上下端をなで消している。口唇内面には突帯が巡り、上端に約2.5㎝の平坦面を形成している。口縁部に4本1組の細い棒状浮文、肩部に羽状縄文、波状沈線、円形浮文が施されている。色調は淡褐色で、胎土は砂粒を多く含み粗い。大廓Ⅱ段階のものと思われる。共伴土器は、壷・器台がある。

4．土器の足跡

駿河湾沿岸地域より西では、大廓Ⅱ－1段階のものが奈良県桜井市纒向遺跡で纒向3式（新）と共伴して出土している(註10)。甲府盆地では、大廓Ⅰ－1段階から継続的に韮崎市坂井南遺跡・西八代郡三珠町上野遺跡1号方形周溝墓で出土し、甲府盆地編年の3期～4期に比定されている（註11)。長野県では、大廓Ⅱ段階のものが茅野市下蟹河原遺跡で出土し、天竜川水系編年のⅡ期（新）に比定されている(註12)。神奈川県では、大廓Ⅱ段階のものが、秦野市砂田台遺跡・平塚市王子ノ台遺跡で出土しており、比田井編年、古墳時代前期Ⅱ段階に比定されている（註13)。埼玉県では、大廓Ⅱ段階のものが、東松山市諏訪山29号墳で出土している(註14)。まだまだ、大廓式土器の出土遺跡の集成には漏れがあると思われるが、概ねこのように理解している。甲府盆地では、地理的要因もあり、早い段階から継続的に土器が搬入されている。長野県には、このルートの延長で搬入されたことがうかがえる。南関東には、Ⅰ－2段階以降、Ⅱ段階を中心にして搬入されている。

いずれにしても、搬入されている量は東海西部系や畿内系土器に比べて少なく、ひとつの遺跡で1点程度である。

赤塚氏は、廻間Ⅱ式期の東海系土器の大量の移動を『難民』の排出現象ととらえているが(註15)、『魏志倭人伝』の対比においては、大変興味深い説明である。しかし、この時期に前後して、量の差はあるが、全国的にものが動いている時期であり、すべて戦争によって排出される『難民』の移動に伴うものとは思われず、もっと多面的に土器が移動する要因を考えてみたい。

5．ものの移動と農耕社会の発展

他地域で製産されたものが移動するには、人を介すことが必要である。この場合、ものを運ぶ主体が誰であるのか、興味がもたれるところである。他地域の人によってものが持ち込まれるものなのか、在地の人が他地域から持ち帰るものなのか。房総半島で見られる古墳時代前期の搬入品には畿内系、山陰系、東海系、北陸系等の土器があり、

また、古墳の副葬品に至っては、大陸系遺物を含めてさらに広範な地域からものがもたらされている。これには、直接的な搬入品と間接的な搬入品があると思われるが、この点が弥生時代に比べて格段に違う点である。

考古学の場合、他地域の遺物を確認することは容易だが、それが移動した要因や移動させた人については確認することが難しい。

古墳時代を弥生時代の飛躍的発展形態としてとらえる場合、これらの「経済活動」を重視する必要がある。交易という概念では説明しずらい面もあるが、交流のあることは事実である。水稲という栽培作物を食糧とする弥生文化は、稲作によって生活様式、まさに文化を縄文時代と一変させた。水稲耕作に付随する様々な技術、祭、生活環境は、縄文文化の発展形態ではなく、大陸から受容し、西から東へ伝播したものである。

「先史時代から現代にいたるまで、社会はその食料獲得の手段、社会的まとまりを維持する仕方、同盟のむすび方、武器庫を、つねに最新のものにしておかなくてはならなかった。」（註16）という一節がある。日本の弥生時代から古墳時代について、これに当てはめて考えてみる。

食料獲得の手段は、弥生時代以降においては主に水稲耕作技術であり、社会的まとまりを維持する仕方は、弥生時代の環濠の掘削であったり、古墳の造営であったり、集団での祭祀というような共同作業であったかもしれない。また、水稲耕作自体、治水から水田造営等、共同作業を余儀なくされる性格のものである。同盟の結び方については、資源のない日本列島の場合、他地域と緊張関係に陥ることは、社会の衰退を意味することになるため、自己に無いものは入手し、有るものは出す、といったような緩やかな経済的な同盟関係を中心として、次第に中国の冊封体制のようなものを北部九州から後に畿内が中心となって行っていったものと思われる。武器庫に関しては、考古学的に検出例が無いため不明であるが、古墳の副葬品から見る限り、武器・武具の発達は認められるものの実戦用かは、解らない。

なぜ、「つねに最新のもの」なのか。それは、社会が要求するためである。社会発展のためには、新しいものが必要である。それが、日本の場合、他の社会との優位性を保つためという、緊張状態での社会発展であったかは、疑問である。広域の経済活動が行われることで、地域が活性化し、その経済圏が「国家」としてのまとまりを産み出す。そこに、価値観を等しくする古墳のような記念物が造営されるのだと考えている。

また、それらの経済圏を形成する過程において、大廓式土器のような他地域のものがその証として各地にその足跡を残しているものだと思われる。

6．おわりに

大廓式土器の足跡は、房総半島においては、東海西部系土器に比べると稀薄ながら、古墳から2例・集落から2例・自然流路から1例確認されている。現在のところ、大廓式土器の千葉県内の遺跡からの出土例は、このように5遺跡から5点程度であり、稀少性の高いものと言えるであろう。これは、古墳時代当時としても価値が付与されていたと考えられ、その傍証として古墳の供献品となっているものである。

古墳の副葬品は、権威の象徴であったり、呪的な力を宿すものとして理解されているが、希少価値のある他地域からの搬入土器も、推論として、土器そのものではないかもしれないが、その出自の地域との関係を掌握しているといった意味に取れば、それなりの権威の象徴として理解できるのではないだろうか。

搬入土器も集落から生活のセットとしてまとまって出土する場合と特定器種のみ大量に出土する場合、少量出土する場合とでは、もたらされた意味が異なる。房総半島で出土する大廓式土器は、現在のところ、それぞれ単独出土例のみであるため、生活をそのまま持ち込むであろう人の集団移住によってもたらされたとは考えにくい。ただ、具体的な搬入要因については、資料数の少ない現時点では確定しかねる。これは、古墳時代の経済と関わる問題であり、房総半島と駿河湾地域が当時なんらかの関係があったことを示唆しているのは明らかであるが、その関係を解明することが必要である。それには、駿河湾地域の状況を把握することも不可欠となろう。

以上のように大廓式土器の足跡を辿りながら、古墳時代の社会の一端を考えてみた。大廓式土器のような非在地系遺物の問題は、古墳時代の社会の仕組みを解明する鍵となるため、今後も検討を

続けて行きたいと考えている。

最後に、ひとつの土器の足跡を辿ることが目的であった本論だが、話が膨らみすぎてしまったことは、ご容赦願いたい次第である。大廓式土器は、非常に特徴的な土器であり、在地の土器とは容易に識別できるので、今後、出土した折には、是非、情報を提供していただけるようお願いして、取りあえずの結びとする。

なお、見識に誤りがある場合には、ご指摘の程、よろしくお願いしたい。

《註》

1．高梨俊夫　1992　「椿古墳群３号墳の調査について」『研究連絡誌』第36号　千葉県文化財センター

2．小野真一・笹津海祥ほか　1966　「沼津市大廓発見の住居跡と土器」『歴史科学』20　静岡県　1990　『静岡県史』資料編２　考古２

3．小野真一　1976　「入門講座弥生土器・東海東部」『考古学ジャーナル』№126・127・129

4．渡井英誉　1994　「東駿河における庄内式期の様相」『庄内式土器研究』Ⅶ

5．赤塚次郎　1996　「東海系土器から見た東日本の古墳時代」『考古学と実年代』第40回埋蔵文化財研究集会第Ⅰ分冊発表要旨集

6．市原市文化財センター　1991　『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡』　財団法人市原市文化財センター調査報告書第40集

7．長生郡市文化財センター　1993　『千葉県茂原市国府関遺跡群』　財団法人長生郡市文化財センター調査報告第15集

8．君津郡市文化財センター　1993　『－千葉県木更津市－小浜遺跡群Ⅴ俵ヶ谷古墳群・マミヤク遺跡』　財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第80集

9．千葉県文化財センター　1986　『八千代市ヲサル山遺跡』

10．桜井市教育委員会　1976　『纒向』

11．小林健二　1994　「甲府盆地の外来系土器」『庄内式土器研究』Ⅴ

12．笹沢　浩　1996　「中部山岳地方の４世紀の土師器」『日本土器辞典』

13．比田井克仁　1994　「南関東における庄内式併行期前後の土器移動」『庄内式土器研究』Ⅴ

14．埼玉県史編纂室　1986　『埼玉県古式古墳調査報告書』

15．赤塚次郎　1992　「東海系のトレース－３・４世紀の伊勢湾沿岸地域－」『古代文化』vol.44

16．ジョナサン・キングトン　管啓次郎訳　1995　『自分をつくりだした生物』　青土社